

三井のリフォーム 住生活研究所長 西田 恭子

金沢ひがし茶屋街

ようやく、金沢のひがし茶屋街を訪れることができた。

金沢には何度か仕事で来ているものの、いつもタイトルな行程で、駅東口のもてなしドームと鼓門（つづみもん）と呼ばれる大空間に感嘆するだけの訪問だった。もちろん駅だけでも総ガラス張りのドームは、雨や雪の多い土地で濡れないようにという、おもてなしの心を感じるし、鼓門は能楽の加賀宝生（かがほうしよ）をモチーフにしたもので、駅に降りただけでも古都北陸に訪れた！と感心させてくれる。

楼」が組み込まれていた。紹介者がいない一見さんではお茶屋遊びが出来ないうえに、一日一組しか受け付けない「一客一亭」の店で、芸子さんとの酒宴を楽しめる。一人でも貸し切り、一人でも貸し切りの茶屋文化の遊び。伝統と文化を重んじながら作られた美術工芸品と、そこでの粋な遊び方を女将から伝授された。粋な遊び方は、女性の私には縁がなさそうなのだが、女将の話はとても面白く、勉強になった。

「このひがし茶屋の建物群も他の古い建物同様に管理維持出来ず、売りに出され、東京の方がお買いになりました。でもそれではないと、街の面々が分担して買い戻しました。今では金沢の街は観光客であふれ、平日は今までの土曜・日曜のような賑わいで、土曜・日曜はお祭りの日のような賑わいです」とのことだ。

独特の茶屋建築も昔のままの再現ではなく、金箔の量の間や赤い朱塗りの階段など、改装時に趣向を凝らしている。

「懷華楼」の入口に掛け

てあった木製看板の左に「椿魚」とあり気になって、ネットで調べてみると、戯遊詩画人の泉椿魚氏の作だった。プロフィールでは、「今日から始まる新しい出会いに期待を膨らませ、感性のおもむくまま、戯句・陶芸・絵画・漆芸などに明け暮れる日々を送っている」とあった。

泉椿魚氏は、この「懷華楼」の修復工事の設計・デザイン・プロデュースにも関わったようで、著書の『風のごとく生きる』という言葉と、金沢の町がすっかりとなじむ気がした。

伝統的建造物が残された街並みは美しい。先日東京都デザイン部会のメンバーからヴォーリスの作品である大丸心斎橋店の心斎橋側の保存や、現存するEVホルの保存、いいてはレストランの再生への賛同の署名を求められた。

各地で歴史的建造物の保存がうたわれながらも壊されていく現状の中、街並み保存の成功例として、ひがし茶屋街の賑わいは、一見の価値があるように思う。

その鼓門は建ってまだ一〇年なのにも関わらず、すでにリニューアルされていた。新幹線が開通し、にぎわつ観光地にふさわしい門構えを維持している。日頃、家のメンテナンスは一〇年周期とつたっていないが、実行されていない物件ばかり見ている私は、一〇年目のリニューアルに、いたく感心した。

さて今回の金沢訪問では、学会の後の見学会に、築一九〇年、金沢で一番大きな茶屋建築を誇る「懷華



西田恭子氏プロフィール＝一級建築士。暮らしの創造に貢献する「三井のリフォーム 住生活研究所」所長。リフォーム設計の経験を活かし、新聞・雑誌・書籍の執筆、各種セミナーで講演を行う。日本女子大学非常勤講師。インテリア学会会員。日本建築家協会正会員。